

遊び場マップを通じた遊びの原風景の保存と
復興に向けた多世代協働ネットワークの支援
＜せんたプロジェクト＞

成果報告会資料

2013年3月2日

1

遊びとまち研究会

本日お話しする内容

1. 活動報告

- ✓ 世田谷での活動
- ✓ 仙台での活動（六郷・七郷地区）
- ✓ その後のフォローアップ活動

2. 活動から得られたこと（成果）

- ✓ 遊び場マップ（昭和版と平成版の比較）作成と震災前後の子どもの遊び場問題の把握
- ✓ 遊び場支援ネットワークとの関わり
- ✓ 世田谷での新しい活動の展開

3. 今後の課題

4. 世田谷区への提言



世田谷区への提言

1. 避難所や仮設住宅には
“子どもの広場”を設置
する！
2. 十代（中学生～小学校高
学年）の力を防災に活用
する！

2013年 3月 2日

成果報告会資料（遊びとまち研究会）



仙台→太子堂へ：被災地を離れる、世田谷のまちを見て遊ぶ、世田谷の子どもたちと交流する

7月 仙台の子どもたちが世田谷訪問

- 0 太子堂小学校サバイバルキャンプ参加、小学生によるインタビュー、ネットワークメンバーによる震災時の映像と講演
- 0 太子堂小学校ワークショップ参加（仙台七夕飾りの製作）
- 0 太子堂～三軒茶屋～三宿まち探検：狭い路地、ポケットパーク、防災トイレ、まちの名所訪問
- 0 ホームステイ（太子堂小学校児童宅）で被災時のヒヤリングも
- 0 太子堂出張所の方の紹介でパブリック・シアター見学ツアー
- 0 世田谷プレーパーク（水遊び、焼きそば）

太子堂小学校サバイバルキャンプ参加

プレーパーク
仕込みで火起
こしは得意



太子堂小児童から
のインタビューに
答える



2013年 3月 2日

成果報告会資料 (遊びとまち研究会)

サバイバルキャンプでの太子堂小児童からの質問

Q:避難所ではどのような食べ物を食べていたのですか?

A:**一袋のクラッカーをみんなで分け合って食べた。それとペットボトルの水が配られました**

Q:避難所の体育館で楽しかったことはどんなことですか?

A:**芸能人が来てくれて、うれしかった。コロッケとか。**

A:**宿題なんかをやらなくて済んだのがよかった!**

印象に残ったまちのあれこれ

「学校に泊まれて楽しかった」「みんなに親切にしてもらった」「小道がいっぱいあって面白かったけど、迷いそうにもなった」「道を使って遊んでみたい」「ゴリラのビルがすごい」「プレーパークでの遊びが小さい時に戻ったようで、楽しかった」「店が多い」「ゴミが多い、くさい匂いもした」

細い路地や駅近
くの古い商店街
に驚いた



ホームステイ先で被
災時の話を。子ども
同士で意気投合。



プレーパー
クで思い切
り遊んだ

被災地でヒヤリング：昔の遊びと遊び場、 現在：震災前と震災後の遊びと遊び場

8月 世田谷のメンバーが仙台へ

- 0 荒井二号公園仮設住宅「昔の遊び場と遊び」ヒヤリング、移動式遊び場で地域の子どもたちと遊ぶ
- 0 ニッペリア仮設住宅「昔の遊び場と遊び」ヒヤリング、移動式遊び場で地域の子どもたちと遊ぶ
- 0 荒浜～海岸公園冒険広場～津波被害の小学校（荒浜・東六郷）の視察
- 0 宿舎提供を受けた上荒井公会堂にて震災時の避難所運営・震災後の防災対策についてお話を聞く
- 0 がれき拾いと復興に向けた農家の試みを視察（トマト収穫）

荒井2号公園応急仮設住宅におけるヒヤリング 「昔の遊びと遊び場」(七郷地区)



2015年5月2日

荒浜に実家のある住民が多い。実家が被災した。



成未報百云資料 (遊びとまち研究会)





日辺グラウンド仮設住宅におけるヒヤリング 「昔の遊びと遊び場」 (六郷地区)



六郷地域。子世帯はみなし仮設へ入居。
家族はバラバラに。孫は被災した東六郷小学校在籍だった。

上荒井公会堂におけるヒヤリング「震災時の避難所運営・地域での防災対策」(七郷地区)

- ✓ 宿舎提供を受けた上荒井公会堂は震災時避難所に
- ✓ 地域は断水せず、公会堂にプロパンがあったため煮炊きが可能だった。高齢者を中心に十数人を受け入れた(日頃から居住地同定し地図に記載)
- ✓ 町内の人々が避難した学校での避難所運営の話(リーダーシップは町会の方がとれた)



2013年 3月 2日

成果報告会資料(遊びとまち研究会)

フォローアップの活動

1. 完成したマップの確認
2. 子どもへのヒヤリングを重ねた
(震災前からのさまざまな問題が被災したことでより重たい問題になる可能性)
3. 高齢者の子どもの遊びや遊び場への考えをヒヤリング：「避難所には子どもはいなかった！」
(目に入らなかった) 「仮設で子どもは遊ばない」



子どもの遊びと遊び場の危機

2013年 3月 2日

成果報告会資料 (遊びとまち研究会)

遊び場マップ昭和世代（昭和20-30年頃）

- 0 食べ物と結びついた遊び：魚、貝とり、キノコ類、イナゴ
- 0 子どもの役割と結びついた遊び：すずめ追い（ぼい）、落ち穂拾い
- 0 豊かな自然（海岸、用水路、松林、川）
- 0 大人との関わり
- 0 危険な遊び場と秘密の遊び

仙台・六郷&七郷地区
遊び場マップ昭和世代
(暫定 version)

昭和の遊び (70-80代の方々へのインタビュー)

七郷地区：
パッタ（めんこみたいなもの、丸い硬い紙で作ってある）でよく遊んだ。家の中や縁側で、つたっこ（あはじき）もした。冬は雪が降ると、竹を割って火であぶって、そりを作り、氷が張っているところなどで滑って遊んだ。農家では若い親世代は野良仕事で暇あひまもゆとりもなかった。あばあさんに子どもを預けていた、それが世代ごとに順繰りに繰り返していた。

六郷地区：
神社での遊び…ゴムとび・縄跳び・お手玉・かくれんぼ 男女問わず一緒にあそんだ（10歳くらいまで）
松林は危険だからといわれ、近づかなかった。自分たちが子どもだった頃は、親が野良仕事から帰ってくる前に、豆ガラに火をつけてご飯・味噌汁を用意するのが仕事だった。それさえ忘れなければ、後は遊んでいても怒られなかった。

田んぼ
✓やぐらの上で雀追い（雀ぼい）、缶を鳴らして稲穂を守った。一家にひとつ父が作ったやぐらがあり、一か所ですべて雀を追い込むと、隣の家のやぐらに移って、みなで追った。終わればもってきたあやつを食べたり、あはじきや お手玉などで遊んだ。
✓稲刈りが終われば：チャンバラ、大縄跳び、キャッチボールで遊んだ。
✓落ち穂拾いをして、給食で食べた。
✓冬は下駄を加工した履物でスケート

イナゴ採りは学校行事：
✓東六郷小学校（昔はてめい、そのうちビニールにいっぱいって大鍋でゆでて、業者へ）
✓荒浜小学校（とったらすぐに業者に）

深沼海岸
✓浜辺ではシジミやナミノコ（ゆでて醤油と砂糖で食べる）、ワタリガニ、シヤコ。
✓海では泳いではいけなかった
✓大人がいるときに綱を張った中でのみ。水踏はよかった。

松林
✓昭和の地震の後に海岸に松が植えられた。
✓晝採り：あみっこ、しようろ、さんたけ、まつたけもどき
✓松葉さらい：松葉を集めてカメの子づくりやたき付けの材料
✓松葉遊び：松の花びらを松葉に刺して、その枚数を数える。

小牛沼
✓スケートをして遊んだ。
✓そのうち、仙台市のごみ置き場になり遊ばなくなった。
✓その後井土浜グラウンドとなった後、海岸公園管理広場になった。

きれいな貞山堀：
✓透明でそこにあるしじみが見えるほど、血洗い、米とぎもできた。

楽しい貞山堀
✓ロープを兩岸の松の木に結び、つかまって、エンジンのない渡し船を漕いだ。
✓泳いではいけなかったため、服を濡らさないよう頭の上にひもで結んで泳いだ。

井土浦
✓馬場と水門の間でつり（みな・なます）
✓仕掛けを投げて、他に遊びに行っている間に釣れていた
✓サイクリングコースができるまでは良く遊んだ

田んぼの雀追い（すずめぼい）
井土浦
楽しい貞山堀
きれいな貞山堀

遊び場マップ平成世代：震災前と震災後

震災前：（赤色）

- 〇昔と同じ海岸沿いの遊び
- 〇遊びの伝承（海の危険、先輩から伝授のお宝探しetc）
- 〇道などまちの中での遊び
- 〇海岸公園冒険広場は人気

震災後：（青色）

- 〇狭くなった
- 〇移動式遊び場の活用（被災後2011年5月から2年の間に7カ所）



子ども関連の公的な黄色と緑は施設を表す。

遊びと遊び場：ヒヤリングを通してわかったこと

昭和から平成へ

- 0 田畑がなくなり、季節ごとの遊びができなくなり、周辺地域から子ども姿がなくなってきた
- 0 孫世代は震災前もあまり外で遊んでいなかった
- 0 児童館、学校、市民センターや公民館での遊びが多かった

震災後

- 0 遊び場が狭くなった
- 0 避難所では子どもの姿が目に入らなかった：「子どもはいなかった」
- 0 若い世代はみなし仮設に住み、孫たちは親が仕事から帰るまで仮設で過ごす（仮設ではあまり遊ばない）

成果（1）：仙台

遊び場と遊びの世代別マップを作る「過程」が重要

- 0 仮設住宅では、異世代から（世田谷の子ども若者）のヒヤリングで記憶を呼び起こし、楽しい記憶に皆で浸る「**遊びの力・効果**」を実感
- 0 **子どもの危機を再認識**：もともとの問題（家庭・学校等）＋震災時の衝撃（津波や揺れの直接間接の影響）＋その後の生活再建過程の危機（場所や生活の変化、大人の大変さ）
- 0 **遊び場づくりの新しいネットワーク**へのアプローチ：自分たちと同じ世代の人・・・これから復興住宅へ入る東六郷小PTA
- 0 時期的意義：仮設住宅にコミュニティごと入居している「今」なら「**遊びの重要性**」を**コミュニティの課題**として共有しやす

2013年 3月 2日

成果報告会資料（遊びとまち研究会）

新しい活動につながった： 災害パトロール・ワークショップへの参加

- 大学生や若手研究者と一緒に昨年12月、せたメンバーの小中学生が参加し、避難の仕方、子どもとしての役割を考えるワークショップに参加
- 仙台に行くことで関心を高め、十代が防災活動に参加する意識を強めることができた



今後の課題

1. 震災後の遊び場についてのヒヤリングの継続

震災後2年では遊びは復活しておらず、見守る必要がある。孫世代と祖父母世代のヒヤリングはできたが、メンバーと同世代の「親世代」にはヒヤリングができていない。（マップは暫定版）

2. 子どもたちの遊び状況は深刻→遊び場支援の重要性

マップ作成から見えてきた変化：遊び場は狭くなり、限定されている。
震災前からの遊び場の危機が加速されている。

被災時は子どもの姿が見えにくくなる→子どものための場の確保の重要性（「避難所に子どもはいなかった」というヒヤリング結果！）

仙台市は広く、移動式遊び場でカバーしているのは若林区、宮城野区（一部）→担い手と資金が必要で、外からのパワーが待たれている

避難所や仮設住宅に“子どもの広場”を設置する

心理的トラウマや生活環境変化に伴うストレスから守るためには遊びの力が必要（日常を取り戻す）

- 場所の確保（避難所、仮設、学校）
- 移動式遊び場のツール：プレイカーの確保
- 子ども優先の食糧など備蓄災害用品を設置、自主管理で災害教育も可能
- 「発散」できる場、寄り添って思いを聞き取れる場、乳幼児のための場（子育て支援の場でもある）など多様な機能が必要
- カフェなど大人が集う場の併設が有効



十代（中学生～小学校高学年）の力を防災に活用する

- 0 せんだプロジェクトで十代のメンバーが活躍（ヒヤリング、被災の視察、遊び場での交流）
- 0 災害パトロール・ワークショップの経験から、**まちの危険個所を日頃の遊び行動などで熟知している中学生は被災時に災害弱者をいち早く救出する担い手になれる**
- 0 中学生が主体的に参加する防災計画の実現が重要、震災発生直後の避難路の点検訓練など
- 0 保護者は「子の安全を確保したい」「被災時には動かないで」という意識がある→日頃からの地域での話し合いが必要
- 0 中学生自身はどう思っているのか？ どのような活動が出来るのか？

まとめ

(プロジェクトを継続させたい！)

マップ作りから始まった活動であるが、1年を経て、多様な方向性に広がっている。ぜひ継続させたい！



2013年 3月 2日